

SHOW HEY シネマルコム

★★★★★

戦場のメリークリスマス 4K修復版

1983年/日本、イギリス、ニュージーランド映画
配給：アンブラグド/23分

2021 (令和3) 年6月17日鑑賞

テアトル梅田

Data

監督・脚本：大島渚

原作：ローレンス・ヴァン・デル・ポスト『影の獄にて』

出演：デヴィッド・ボウイ/トム・コンティ/坂本龍一/ピー

トたけし/ジャック・トンブ

ソン/ジョニー大倉/内田

裕也/三上寛/室田日出男

/戸浦六宏/金田龍之介/

内藤剛志/石倉民雄/三上

博史/車邦秀/ジェイム

ズ・マルコム

👁️👁️ みどころ

学生運動と弁護士業務の忙しさのため、大島渚監督作品とはスレ違い続киだつた私には、4K修復版は必見！今なお、毒舌の喋りと映画監督業を続けているビートたけしの、若き日の“軍曹姿”も楽しんだ。

「一に素人、二に歌手、三四がなくて五に映画スタア、六七八九がなくて十に新劇俳優」という“大島持論”による、英日の美青年ミュージシャンたるデヴィッド・ボウイと坂本龍一の起用も大成功！ジャワ島の俘虜収容所内でトントン対立していたこの2人の“キスシーン”が生まれたのは、なぜ？その波紋は如何に？

『戦場のアリア』（05年）のようなクリスマスもあれば、本作のようなクリスマスも！本作中盤の静かなクライマックスと、ラストでビートたけしが話しかける「メリークリスマス」の声をしっかり関連付けて味わいたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■大島渚の時代とは？その生きざまは？その作品群は？■□■

私は1949年生まれだが、大島渚は1932年生まれだから17歳違い。また、1974年に弁護士登録した私は26期だが、最初に勤務した堂島法律事務所の経営者の先輩弁護士3名は12期で、1930～32年生まれだったから、これも15～17歳違いだ。去る5月30日に小林亜星が88歳で亡くなったことが発表されたが、彼が産まれたのも1932年。1945年8月15日の終戦を14～15歳で迎えた彼らは、概ね戦後のたいへん貧乏（食糧難）な混乱期の中で多感な思春期・青春期を過ごしかつ勉学に励んだから、概ねこの世代の知的レベルと思考能力は高い。いわゆる、その後の“ゆとり世代”や、今ドキの“平和や豊かさの中で育った軟弱な世代”とは大違いだ。

“戦後の日本映画史に屹立する「知」の巨人”と呼ばれた大島渚監督の思索と創造の足

跡を多彩なアングルから再検証した『大島渚全映画秘蔵資料集成』が2021年春に刊行されたが、それを紐解くまでもなく、パンフレットにある、樋口尚文（映画評論家・映画監督）の「大島渚、その人と作品」や、原正人（本作エグゼクティブプロデューサー Hara Office 代表）の「“タイミング” イズ・エブリシング—映画『戦場のメリークリスマス』製作から公開までを振り返って—」を読めば、大島渚の時代と彼の生きざま、そしてその作品群が理解できる。

1967年に大阪大学法学部に入学しすぐに学生運動に参加した私は、京都大学法学部在学中の彼が学生運動に参加し、京都府学連委員長をしていたことを知っていたから、その当時から彼の人間像に興味を持っていたが・・・。

■残念ながら、大島作品とはすれ違いの連続！■

大島監督初期の『愛と希望の街』（59年）、『青春残酷物語』（60年）、『日本の夜と霧』（60年）は、日活の“青春モノ”ばかり観ていた中学時代の私にはさすがに難しすぎた。また、学生運動に没頭していた大学3回生（1970年）までも、急遽一人ぼっちでの司法試験勉強に切り替えた1971年1月26日以降も、大好きな映画を映画館で鑑賞する時間はほとんど取れなかった。また、弁護士登録を1974年にした直後の私は超多忙だったし、1979年7月に独立して自分の事務所を持った後は「西淀川公害訴訟」や「大阪モノレール訴訟」等にも取り組み、忙しさは一層加速していたから、映画館に行く時間など全く取れなかった。そのため、1983年公開の『戦場のメリークリスマス』も当然観ていない。

そんな事情で、私は大島監督作品とは縁がなかった。まともに観たのは、彼の遺作になった『御法度』（99年）だけだ。そんな私だが、弁護士生活50年近くになった今、時間はたっぷり、自由もたっぷりある。そんな現況下、『戦場のメリークリスマス 4K修復版』と『愛のコリーダ 4K修復版』が公開されたから、これは必見！

■パールムドール無冠を逆バネに！83年公開は大ヒット！■

1978年のカンヌ国際映画祭に『愛の亡霊』を引っ提げて登場した大島監督は見事に監督賞を受賞していたから、本作への期待は大きく、1983年の第36回カンヌ国際映画祭のパールムドール賞は本作で確定！誰もがそう予想していたが、何とそこでパールムドール賞を受賞したのは今村昌平監督の『楡山節考』（83年）だったから、アレレ！

大学時代の私の生活は夜型だったので、毎晩朝日放送ラジオの「ABCヤングリクエスト」を聞いていた。しかし、弁護士になってからは夜のラジオ番組を聞く時間は全くなかったから、1981年に始まった『ビートたけしのオールナイトニッポン』が大人気になっていたことも全然知らなかった。しかし、ビートたけしが同番組で『戦メリ』の顛末を面白おかしくネタにして喋ったため、『戦メリ』は話題の映画として若者たちの熱い関心を集めたようだ。なるほど、なるほど。

カンヌ国際映画祭で無冠だったこと、確実にとされていたパールムドール賞を今村監督の『楡

山節考』にさらわれたことを“笑いのネタ”に、更にそれを本作宣伝の逆バネに使うとは！その当時から、ビートたけしの“話術”は天才的だったわけだ。

■□■キャストの妙に注目！これぞまさに前代未聞！■□■

映画では、どんな監督がどんなテーマで？どんな俳優がどんな演技を？○○の原作を△△が映画化！等等が興味と評判を集めるが、そこからわかるとおり、映画製作ではキャストが重要な作業になる。日本の映画界には長い間「五社協定」があり、これによって有名映画スターの自由な共演が阻害されていたが、それに断固反対し、立ち上がったのが三船敏郎、石原裕次郎、勝新太郎たちだ。そんな苦勞の甲斐あって、日活女優だった吉永小百合と東映俳優だった高倉健が共演した『海映』（82年）が実現したわけだ。そして、そんな異色の組み合わせの中で次々と傑作が生まれていった。しかして、松竹ヌーヴェル・ヴァーグを代表する大島監督のキャストिंगについての口癖は「一に素人、二に歌手、三四がなくて五に映画スタア、六七八九がなくて十に新劇俳優」だった。それを、その通り実現したのが本作だ。

私は英国人の人気ミュージシャン、デヴィッド・ボウイを全然知らなかったし、日本の若手ミュージシャン、坂本龍一もほとんど知らなかったが、本作にビートたけしが出演すると聞いてビックリ！1971年に清純派歌手としてデビューした小柳ルミ子と二分する人気を誇っていたアイドル歌手、天地真理が、1980年代になって人気急低下していく中、日活ロマンポルノの『魔性の香り』（85年）に出演したことにもビックリさせられたが、ビートたけしの本作への出演はそれと並ぶ驚き（？）だった。もっとも、彼は本作が映画初出演ではなく、『マノン』（81年）と『すっかり・・・その気で』（81年）で映画俳優としても注目を集めていたが、本作でのそんな彼の演技は？

私にはお世辞にもうまいとは言えないが、「これがビートたけしの演技だ」というものはよくわかる。また、あの独特の“愛嬌”はビートたけしと同じような“浅草の芸人”だった渥美清と共通するものがあるから、それを本作でうまく引き出した大島監督の演出はさすがだ。ちなみに、本作のラストを飾る“大トリ”も、大寫しの中でビートたけしが「メリークリスマス」と語るシークエンスだから、それに注目！

■□■“戦闘シーンのない戦争映画”の物語は？面白さは？■□■

本作の原作になったのは、ローレンス・ヴァン・デル・ポストが自らの収容所経験を元に書いた『クリスマス3部作』をまとめた『影の獄にて』（54年）。したがって、本作の時代と舞台は、1942年（昭和17年）、ジャワ島レバクセンバタにある日本軍の俘虜収容所になる。そのメインストーリーは、日本軍の輸送隊を襲撃した英国陸軍少佐ジャック・セリアズ（デヴィッド・ボウイ）の処分を巡る、セリアズと俘虜収容所所長ヨノイ大尉（坂本龍一）との確執。そこに、英国陸軍中佐でありながら、日本語が堪能だったため日本軍と俘虜たちの通訳をしているジョン・ロレンス（トム・コンティ）と、②これぞ典型的な日本軍人、と言えるハラ軍曹（ビートたけし）、そして、③日本軍に対してあくまで反抗的な

英国軍の俘虜長ヒックスリー（ジャック・トンブソン）らが絡みながら物語が進行していく。

そのメインストーリーの描写役は、原作者と同じ名前が登場しているロレンスだが、本作ではこのロレンスを含めすべての男たちの個性の強さが際立っている。剣道の達人である収容所所長のヨノイ大尉の純真さ（？）や、ハラ軍曹の曲者ぶり（？）はもとより、本作では、当時人気絶頂のアイドル歌手だったというデヴィッド・ボウイも、その美青年ぶりとあくまで無罪を主張する軍人としての信念の強さが際立っている。導入部での朝鮮人軍属カネモト（ジョニー大倉）の切腹問題を通して、収容所内における一通りの人物像が紹介されるが、そこから日本軍の輸送隊を襲撃したセリアズの有罪・無罪を巡って展開されるハラハラドキドキの展開は興味深い。

そんな中で突然起きるのが、セリアズとヨノイとの伝説の“キスシーン”だが、これは一体ナニ？これは、ベルナルド・ベルトルッチ監督が「映画史上最高に美しいキスシーン」と感嘆した名シーンだが、パンフレットによると、これは“カメラ事故の産物”らしい。大島監督が後に全く新しい解釈で新選組の一面を描いた『御法度』（99年）では、ある日、松田優作の長男、松田龍平が演じる妖しい美貌の剣士が入隊してきたことにより、厳しい戒律によって結束を固めてきた新撰組の隊士たちの間に起きるさまざまな騒動を、匂い立つような男の色気と殺気の中で描いていたが、その原点はひょっとしてここに・・・？なるほど、デヴィッド・ボウイや坂本龍一のような美男子同士なら、それもありなん・・・？

■□■クリスマスいろいろ！本作のクライマックスは？■□■

クリスマスには各国・各地でいろいろな行事が行われるが、“戦場”ではそれはままたらないもの。しかし、『戦場のアリア』（05年）『シネマ33』（214頁）を觀れば、長く苦しい塹壕戦が続く中でも1914年12月24日のクリスマス・イブは、敵味方の区別なく祝うことができたことがよくわかる。しかして、『戦場のメリークリスマス』と題された本作では、1942年のクリスマスとその前後の物語がクライマックスになるので、それに注目！

日本陸軍の考え方と英国陸軍の考え方が根本的に異なることは、本作の日本人軍人、ヨノイやハラ vs 英国人軍人、セリアズやロレンスやヒックスとの“議論”と“語り”を聞いているとよくわかる。それを本作で浮かび上がらせているのは、カネモトの切腹とヨノイの剣道へのこだわりだ。そして、ヨノイもハラも全く理解できないのは、英国陸軍中佐でありながら日本語が堪能であるため唯々諾々と（？）通訳の役割に甘んじている（？）ロレンスの生き方だ。他方、日本に“武士道”があれば、イギリスには“騎士道”がある。そんな根性で（？）英国陸軍人の維持と誇りを徹底的に主張するのがセリアズ。したがって、美青年同士のヨノイがセリアズに心惹かれたとしても、あの俘虜収容所が舞台では、この2人が心話し合う場所はどこにもないはずだ。本作中盤では、ヨノイ大尉の登場によって一命をとりとめたカネモトに対して、切腹を命じたところから、俘虜収容所内でさ

まざまな混乱と事件が生まれてくることに。

混乱する現場に激昂したヨノイは、全員に48時間の謹慎と断食という“行”を命じたが、中でもセリアズは弔いのため赤い花を摘み俘虜たちに配ったり、そこに饅頭を隠したり抵抗を示したからすごい。そのうえ、何と宿舎内で無線機が発見されたから、セリアズとロレンスは独房に収容されることに。そんな中で訪れる本作中盤の静かなクライマックスの第1は、セリアズがロレンスに対して壁越しに語る、少年時代の思い出。それは、彼が身体の不自由な弟にした酷い仕打ちだが、その体験は今どういう形でセリアズの内面の中に宿っているの？第2は、酒に酔ったハラがセリアズとロレンスと呼び出し、「ローレンスさん、私、ファーゼル・クリスマス」と笑いかけながら交わす会話。ハラはそこでヨノイ大尉の許可を得ないままセリアズとロレンスを宿舎に帰してしまっただけで、アレ・・・。そんなことをすれば、軍法会議モノでは・・・？

この2つのエピソードはクリスマスなればこそそのもの。クリスマスだったため、セリアズもハラも不用心に(?)自分の内面を見せてしまったわけだが、そんな“戦場のクリスマス”をあなたはどうか受け止める？

■□■本作と『戦場にかける橋』(57年)の対比の妙も! ■□■

デビッド・リー監督の『戦場にかける橋』(57年)は、橋の建設をめぐる、イギリス軍のニコルソン大佐と捕虜収容所長齋藤大佐との間で展開される“攻防”を描いた名作だった(『シネマ14』152頁)。同作はラストでの橋の爆破が見事なクライマックスだったが、ビルマ・タイ国境近くにある日本軍の第16捕虜収容所における齋藤とニコルソン大佐の騎士道vs武士道のガチンコ対決も興味深かった。頑として命令に従わないニコルソン大佐は齋藤の命令によって“1人部屋”に収容・監禁されてしまったが、さて、本作でヨノイ大尉が命じるセリアズへの刑は？

それは“生き埋めの刑”。冒頭に登場する軍法会議のシークエンスを見ると、俘虜収容所内でも軍法会議が機能しているものと思っていたが、そうであれば、いくら何でも“生き埋めの刑”はないはず。したがって、こんな刑でセリアズが死んでいくという脚本は少し問題ありだが、本作ではそれは無視し、生き埋めにされているセリアズの前にやってくるヨノイ大尉の行動に注目。それはセリアズの髪を切って懐に入れ、丁寧に敬礼して去っていくシークエンスだが、これをあなたはどうか理解？それはラストを観ればはっきりわかるし、その中で『戦場のメリークリスマス』というタイトルをつけた意味もハッキリ分かるはずだ。

『戦場にかける橋』は劇的かつダイナミックなラストのクライマックスがお見事だったが、本作はビートたけしが大書しになる中での静かなクライマックスの見事に注目！

2021(令和3)年6月25日記